

## 伊吹山山頂の花を楽しむ



**上 ニッコウキスゲ (山頂近くで)** カノコソウなどの花が咲いている。今日の花案内人は御宮知さん。花や茎、葉などの特徴、その花の近縁種、名前の由来など詳しい説明をしつつ遊歩道を登っていく。

### 《連理・比翼》

参加者中に5組の御夫妻が居られる。いずれも社会では高齢者とされる年頃の方々、揃って山歩きを楽しまれるとは、なによりの幸せに思える。折りしも、この山特有のキバナノレンリソウ（黄花の連理草・マメ科レンリソウ属）とヒヨクソウ（比翼草・ゴマノハグサ科クワガタソウ属）が花を咲かせている。「連理(の枝)」も「比翼(の鳥)」も唐の詩人白樂天が「深い愛を表すもの」として詠った言葉で、これらの植物の形態から夫々の名前が付けられたと言う。

ちなみにキバナノレンリソウはヨーロッパ原産の植物。それが伊吹山の山頂近くに自生していることこそ「織田信長がポルトガル人の宣教師に命じて、西洋の草花を植えさせた」という話の証左と言われている。

**下 シモツケ 《大昔はさんご礁だった伊吹山》** 山頂近くで昼食。御宮知さんが足元の岩、石から化石を探し出してくる。ウミユリの化石だそうだ。以前土庫病院友の会ハイキング講座「地質から見た近畿の山々」で「付加体」を学んだ。

地球の表面は何枚かの岩盤(プレート)で覆われており、



**上 キバナノレンリソウ**



そのプレートの一つがアジア大陸プレートの下にもぐりこむ際に、日本列島にくっついたり、乗っかったりしたのが「付加体」で、伊吹山もその一つ。この山全体が2億5千万年以前には太平洋のさんご礁だったとのこと。滋賀県最高峰の頂上で、太平洋の白いさんご礁を思い浮かべながら、地球史の長いドラマを想像させられて面白い。ここにはウミユリやフズリナなどの化石が多いと言う。 右 イブキフウロ



## 二上山だより



### エゴノネコアシ

同行の人達に「これが猫の足に見えるか」と問うと、「そう言われれば、でもこれ何」と問い返される。今、エゴノキの枝の先端に、左の写真のような物がたくさん着いている。これはエゴノネコアシと呼ばれる虫こぶで、中では「エゴノネコアシアブラムシ」という小さな昆虫がたくさん育っていく。

エゴノキは御存知のように5月頃、純白の花を沢山吊り下げ

る、爽やかさの象徴のような木。街路樹としても植えられ、幹

は床柱や天井の財に使われ、実は洗濯に用いられたと言う。さて、このエゴノネコアシで育ったアブラムシはアシボソやチヂミザサという別の植物に移ってそこで夏を過ごし、秋にエゴノキに移るとい生活サイクルをもっている。植物の組織を変形させて、その中で子育てをする小さな生き物たちのふしぎな能力に舌を巻くばかりだ。

エゴノネコアシは二上山葛城市側登山口の初田川公園トイレ近くで見ることが出来る。



上 エゴノキの花(5月)

## 今、二上山で咲いている花



左の写真は**フタナ**。初夏や秋に、登山口の鳥谷口古墳の斜面を覆って咲き、二上山頂上でも見るようになった。タンポポに似るが、キク科エゾコウゾリナ属、元々ヨーロッパ原産。外国からの「侵入植物」として嫌われており、確かに他の植物を駆逐するかのよう、野原一面を黄色に染めて咲き誇ったり、山頂付近にまで広がってくるといい気はしない。

しかし、持ち込んだのは人間であり、フタナには気の毒。種名の豚菜はフランス語名の「ブタのサラダ」の訳と言う。

以上138号